西富田新田遺跡Ⅱ

にしとみだしんでんいせき

-B地点の調査-

2011

本庄市教育委員会

序

本庄市は、埼玉県北部の交通の要衝であります。関越自動車道・本庄－児玉インターチェンジを控えているところから付近には工業団地等が造成され、その周辺にも次々と開発が及んでおります。ここに報告する西富田新田遺跡は、古くからその存在が知られており、昭和46年に分譲住宅地造成に伴う発掘が実施され、その概要は『本庄市史』資料編にも掲載されております。このたびの発掘調査は、この『本庄市史』に掲載された調査区域の隣接地に相当しています。

古墳時代の初期に女堀川に沿った微高地上に集落を構えた人々は、古墳時代中期に入ると次々と周辺の台地へと進出して、台地上の畠地の開墾を進めていったことが推定されております。今回の西富田新田遺跡Ｂ地点の発掘調査によって検出された埋蔵文化財も、このような先人たちの営みの一端を示す基礎資料となるものであり、古墳時代集落の具体的な様相の一端を明らかにすることができました。

この発掘調査の記録は、本書によって永く後世に伝えることになりましたが、このような記録の積み重ねによって、少しずつではありますが、私たちを育んでくれた地域の歴史への理解が深まっていくことでしょう。ここに、この発掘調査報告書が刊行できましたことは、株式会社横尾材木店をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。この調査報告書が、この地域の皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成23年６月15日

本庄市教育委員会

教育長　　茂木孝彦

例　言

1．　本書は、埼玉県本庄市西富田字新田811－1に所在する西富田新田遺跡（県遺跡No.53-094）B地点の発掘調査報告書である。

2．　調査地点の名称については、本報告東側において昭和46年3月20日から同年5月16日にわたり発掘調査が実施されていることから、本調査地点を西富田新田遺跡B地点と称する。

3．　発掘調査は、株式会社 横尾材木店（代表取締役 横尾 守氏）による分譲宅地造成にかかる区画道路建設に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市教育委員会が実施したものである。

4．　発掘調査は、西富田新田遺跡の84.1㎡を対象として実施した。

5．　発掘調査の期間は、以下のとおりである。

自　平成22年12月21日
至　平成23年 1月 5日

6．　発掘調査の担当は、本庄市教育委員会文化財保護課 太田 博之並びに大熊 季広があたった。

7．　整理調査の期間は、以下のとおりである。

自　平成23年4月 1日
至　平成23年6月20日

8．　報告書刊行のための整理作業及び報告書作成作業は、整理作業参加者の協力を得て、太田・大熊ならびに松本 完が行った。

9．　本書の編集は、整理作業参加者の協力を得て、大熊があたり、執筆は第Ⅱ章第1・2節を太田が、それ以外を大熊が担当した。

10.　発掘調査及び本書作成にあたって、下記の方々や諸調査機関よりご助言ご協力を賜った。記し感謝いたします。

金子 彰男　坂本 和俊　外尾 常人　田村 誠　中沢 良一　長瀧 歳康　丸山 修　矢内 勲

11. 本書に関する資料は、本庄市教育委員会が管理・保管する。

12. 本報の発掘調査、整理調査および報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

発掘調査組織（平成22年度）

主体者	本庄市教育委員会	
	教育長	茂木　孝彦
事務局	事務局長	腰塚　修
	文化財保護課	
	課長	金井　孝夫
	副参事兼課長補佐	鈴木　徳雄
	主査	恋河内昭彦
	主任	松澤　浩一
	主任	松本　完
	臨時職員	的野　善行
調査担当	埋蔵文化財係長	太田　博之
	主査	大熊　季広

整理・報告書刊行組織（平成23年度）

主体者	本庄市教育委員会	
	教育長	茂木　孝彦
事務局	事務局長	関和　成昭
	文化財保護課	
	課長	金井　孝夫
	副参事兼課長補佐	鈴木　徳雄
	主幹	恋河内昭彦
	主査	松澤　浩一
	主任	松本　完
	臨時職員	的野　善行
整理担当	課長補佐兼埋蔵文化財係長	太田　博之
	主査	大熊　季広

凡　例

1．　本書所収の遺跡全測図・各遺構図における方位針は、座標北を示す。

2．　本書所収の地図のうち第２図は、国土交通省国土地理院発行１/25,000「本庄」(平成10年発行)及び同「伊勢崎」(平成15年発行) をもとに、また第３図は、「本庄市都市計画図10・11・16・17」１／2,500 (平成10年測量)をもとに加筆・作成した。

3．　本報告書の図中における各種遺構の略号は、下記のとおりである。

SI…竪穴住居跡　　SK…土坑　　SD…溝址

4．　本書報告書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に下記のとおりであるが、紙幅の関係からこれに当たらない場合には、個別にスケールを付した。

〔遺構図〕

竪穴住居跡……１／60
〃 カマド……１／30
〃 貯蔵穴……１／30
土　　坑……１／60
ピ　ッ　ト……１／30

〔遺物図〕

土　器……１／4
土製品……１／2
石製品……１／2

5．　遺構断面図の水準数値は海抜高度を示し、その単位はｍである。

6．　遺構断面図のスクリーントーンは地山を示す。

7．　観察表中におけるNo.欄における数値は、各出土遺物図中の番号ならびに各遺物出土状況図中の番号、遺物写真図版中の番号に、それぞれ対応している。

8．　観察表中の単位は、法量がcm、重さはｇである。また「－」は計測不能を、( )内の数値は残存値を、〔　〕内の数値は推定値を表している。

9．　観察表中の胎土・色調欄における鉱物等の略号は下記のとおりである。また、「内」・「外」はそれぞれ器内面・器外面を表している。

片：片岩粒　　角：角閃石　　石：石英粒　　雲：雲母粒子　　白：白色粒子　　赤：赤色粒子

10.　観察表中の備考欄における「残」は、残存率を示し、完形品を指標としたその比率値である。

目 次

序

例言

凡例

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯…… 1

第Ⅱ章　遺跡の環境…… 2
　第1節　地理的環境 …… 2
　第2節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　西富田新田遺跡B地点の調査…… 5
　第1節　遺跡の概要 …… 5
　第2節　基本層序及び検出された遺構と遺物…… 7
　　1．基本層序 …… 7
　　2．竪穴住居跡 …… 7
　　3．ピット …… 16

第Ⅳ章　まとめにかえて…… 16

参考文献

写真図版

報告書抄録

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

平成22年９月17日、清水 玲子・永瀬 久惠・坂爪 知子氏より本庄市西富田字新田811-１の土地、合計2,653.0㎡に分譲宅地造成工事の計画があり、これにかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。これを受け、市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか、確認を行った。これにより、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 西富田新田遺跡（県遺跡No. 53-094）が所在することが判明した。

西富田新田遺跡は、昭和46年３月20日から同年５月16日にかけて分譲地造成工事に伴い発掘調査が実施され、古墳時代竪穴住居跡13棟、土坑10基、溝状遺構が検出されている。この発掘調査の成果は、「西富田新田遺跡発掘調査概報」(菅谷、1972)および「本庄市史資料編」(本庄市、1976)によって報告され、古墳時代の集落遺跡であるとともに、一部ではあるものの複数の石製模造品が集中して出土する、屋外祭祀遺構の可能性が指摘された遺跡として知られていた。さらに1993年に開催された、第2回東日本埋蔵文化財研究会「古墳時代の祭祀―祭祀関係の遺跡と遺物―第Ⅱ冊」においても本遺跡は紹介され、住居内から出土した石製模造品のほかに鏡状土製品、土製馬、鞍状度土製品が実測図とともに報告され(佐藤、1993)、古墳時代集落においても祭祀的性格の高い集落であることが再認識されていた。しかも照会のあった建設予定地は、昭和46年度調査地点の西側隣地に相当し、発掘調査当時から基壇状の高まりが指摘された地点でもあり、古墳時代集落が続いているものと予想された。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保護のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成22年10月７日から同月19日まで現地調査を実施した。その結果、当該埋蔵文化財包蔵地において、複数の古墳時代の竪穴住居跡や土坑等を検出した。

本庄市教育委員会では、以上の試掘調査の成果に基づき『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに、１.協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である西富田新田遺跡が所在することから現状保存が望ましいこと、２.やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第１項の規定により、『 埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、３.『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、４.本回答後は、関係機関との協議を徹底することとの旨を通知した。

その後当該地を新たに取得し、分譲宅地造成工事を引き継いだ株式会社 横尾材木店と市教育委員会は、先の試掘調査結果等をふまえ、数度にわたり協議し、現状で保存できるよう調整を行った。この協議の結果、住宅地部分においては盛土造成を実施し、保護層の確保に努めることとなったが、区画道路部分の計画変更は困難であるとの結論に達し、やむを得ず発掘調査を実施し記録保存することとなった。平成22年11月４日付けで、株式会社 横尾材木店代表取締役 横尾守氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では、同届出を同年12月20日付け本教文発第277号で埼玉県教育委員会あてに進達し、また同12月20日付け本教文発第278号で本庄市教育長から『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。平成23年2月14日付け教生文第５-1183号で埼玉県教育委員会より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があった。

（本庄市教育委員会事務局）

第Ⅱ章　遺跡の環境

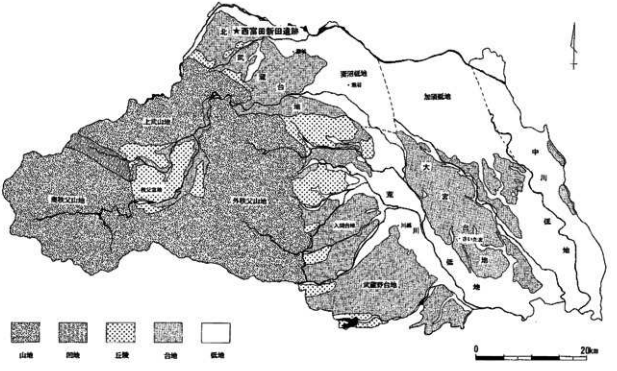
第１節　地理的環境

本書で報告する西富田新田遺跡は、ＪＲ高崎線本庄駅の西南西約2.3㎞の本庄台地上に位置している。西富田新田遺跡の所在する本庄市は埼玉県の北西部に位置し、東側は深谷市および児玉郡美里町と、西側は児玉郡神川町、南側は秩父郡皆野町および長瀞町、北西側は児玉郡上里町、北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市と接している。

本庄市の地形は、南西部の山地および丘陵、中央部に相当する児玉市街地から本庄市街地にかけての台地、北東部の利根川右岸に展開する低地に大別される。山地部分は、上武山地と呼称され、群馬県西南部の赤久縄山を中心とする地域と、埼玉県北西部の標高1,037 mの城峯山を主峰とする山地の総称であり、南東から北西方向へと展開している。丘陵部は、上武山地の裾部から北東方向へと半島状に延び、児玉丘陵と呼称されている。この児玉丘陵からは、第三系の生野山丘陵・大久保山丘陵が断続的に延長している。

西富田新田遺跡の立地する台地部は、身馴川扇状地と神流川扇状地の複合地形であり、本庄台地と呼称されている。台地上には南西から北東方向へ流下する中小の河川が流下し、河川周辺部は沖積化が進行している。台地北端部は上里町金久保付近から本庄市鵜森にかけて段丘崖を形成し、この段丘崖を隔てて、利根川右岸の低地と接している。低地部は、利根川や烏川による氾濫原であり、自然堤防の発達が顕著で、下流域の妻沼低地、加須低地へと連続している。

西富田新田遺跡が所在するのは本庄台地の奥部で、現行河川周辺の沖積地帯から離れ、付近は比較的乾燥した畑地帯となっている。



第１図　埼玉県の地形

本庄市
神保原町
沼和田
明忠町
久保田
中久保
新田
西方田
宮田
北根
東京電力工場
東京電力工場
東京電力工場

★西富田新田遺跡　1．下野堂遺跡　2．八幡山古墳　3．三杢山古墳　4．小島本伝遺跡　5．元屋敷遺跡　6．前の山古墳　7．蛍影山古墳　8．小島御手長山古墳　9．山の神古墳　10．下野堂二子塚古墳　11．窪前遺跡　12．本郷東遺跡　13．下廓遺跡　14．二本松遺跡　15．西富田遺跡　16．弥藤次遺跡　17．夏目西遺跡　18．夏目遺跡　19．薬師遺跡　20．薬師元屋舗遺跡　21．社具路遺跡　22．西富田本郷遺跡　23．雌篠遺跡　24．笠ヶ谷戸遺跡　25．西富田前田遺跡　26．九反田遺跡　27．元富古墳　28．熊野十二社古墳　29．公卿塚古墳　30．元富東古墳　31．元富遺跡　32．七色塚遺跡　33．久下東遺跡　34．宥勝寺北裏遺跡　35．前山２号墳　36．東谷遺跡　37．前山１号墳　38．東谷古墳　39．今井諏訪遺跡　40．久城前遺跡　41．塔頭遺跡　42．地神遺跡　43．今井遺跡群　44．観音塚遺跡　45．下田遺跡　46．四方田遺跡　47．山根遺跡　48．大久保山遺跡　49．後張遺跡　50．飯玉東遺跡　51．電電下遺跡　52．中畑遺跡　53．川越田遺跡　54．梅沢遺跡　55．東牧西分遺跡　56．今井川越田遺跡　57．掘向遺跡　58．藤塚遺跡　59．柿島遺跡　60．左口遺跡

第２節 歴史的環境

西富田新田遺跡は古墳時代中期を中心とする集落遺跡である。周辺部では、弥生時代における集落形成が比較的低調であったのに比べ、古墳時代の集落遺跡は急激な増加を見せ、遺跡立地も弥生時代までの丘陵部から、台地縁辺部や沖積化が進行した台地内部の微高地上へと展開している。

古墳時代前期の集落には、久下東遺跡（33）、下田遺跡（45）、後張遺跡（49）、飯玉東遺跡（50）、川越田遺跡（53）等があげられる。このうち後張遺跡は、古墳時代前期から中期にかけて中核的集落として知られている。

古墳時代中期には、前期から継続する集落のほかに、西富田新田遺跡のように、女堀川左岸の微高地および台地内奥部に、新たに展開する集落が出現する。これらの集落遺跡には、二本松遺跡（14）、西富田遺跡（15）、弥藤次遺跡（16）、夏目西遺跡（17）、夏目遺跡（18）、雌篠遺跡（23）、笠ヶ谷戸遺跡（24）、九反田遺跡（26）、四方田遺跡（46）等が知られ、一集落内における住居軒数も一段と増加している。また、これらの集落のなかには、西富田新田遺跡にも近い夏目遺跡のように、鍛冶関連遺物や畿内系土器・朝鮮半島系土器を模倣した地元産土師器などが検出され、西日本方面との交渉または彼地からの人間の移住を想定しうる例も見られる。前代までは、ほぼ未開拓の状態であったと思われる台地内奥部への集落の進出は、これを可能とする新技術の獲得と、人口の増大とを背景としたものであったろう。

古墳時代後期を中心とする集落には、小島本伝遺跡（４）、薬師元屋舗遺跡（20）、社具路遺跡（21）、東谷遺跡（36）、山根遺跡（47）などがあり、これらの遺跡の多くは、古墳時代終末期から一部は奈良・平安時代へと連続している。

一方、集落遺跡の展開にあわせ、墳墓の築造も活発に行われている。周溝墓は、下野堂遺跡（１）、宥勝寺北裏遺跡（34）、大久保山遺跡（48）で検出され、いずれも古墳時代前期の築造であることが確認されている。古墳は前期後半以降、台地縁辺部や丘陵周辺などを中心に各所に出現してくる。八幡山古墳（２）、三杢山古墳（３）などを含む旭小島古墳群は県内有数の古墳群として知られ、全長70ｍ以上の前期前方後円墳である前山１号墳（37）と、直径65ｍの中期大型円墳である公卿塚古墳（29）は、それぞれの時期を代表する大型首長墓である。なお、大久保山丘陵の北東斜面地には埴輪窯跡が所在しており、当地域においても埴輪生産の行われていたことが確認されている。

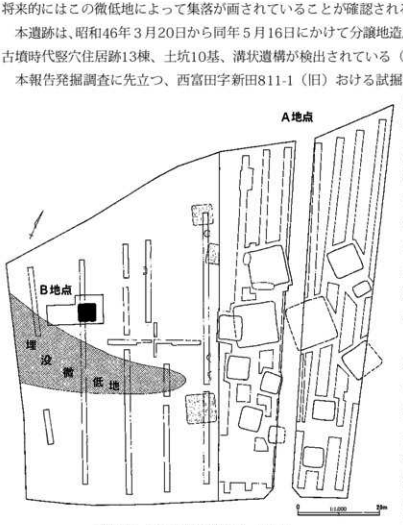
第Ⅲ章　西富田新田遺跡B地点の調査

第１節　遺跡の概要

西富田新田遺跡は、JR高崎線本庄駅の北西約2.3km、本庄市千代田四丁目に所在する本庄西小学校付近の台地北端部段丘崖上から南西約2.2kmの本庄台地内奥部に位置している。遺跡の範囲としては、北西から南東方向の最大幅約270ｍ、北東から南西方向の最大幅約150ｍを測り、面積は27,322㎡である。遺跡付近の標高は65.4～66.0ｍを測り、南西から北東方向へとわずかな傾斜を有している。遺跡周辺は、一定の気象条件下で湧水し流下する野水、「久城水（ぐじょうみず）」の湧水池が集中する区域でもある。本遺跡北西方向100mには西原（カモ池）湧水池、南西方向400mには下郭街道添湧水池、そして南東方向120mには西富田境湧水池が所在している（増田 一裕、1990・1992）。本報告の西富田新田遺跡B地点の周辺の試掘調査においては、調査区南側に北西方向に巻尾状に延びる埋没微低地（埋没谷の谷頭部）が確認されており、その方向から西原（カモ池）湧水池へと続いているものと考えられる。また、郭街道添湧水池から流下する「久城水」流路は包蔵地中央を東西へと走ることから、将来的にはこの微低地によって集落が画されていることが確認されることも予想されよう。

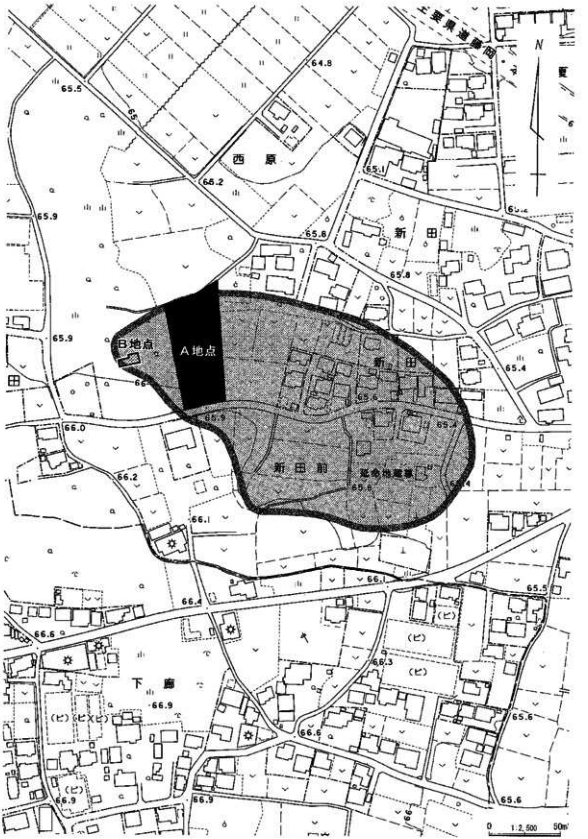
本遺跡は、昭和46年３月20日から同年５月16日にかけて分譲地造成工事に伴い発掘調査が実施され、古墳時代竪穴住居跡13棟、土坑10基、溝状遺構が検出されている（A地点）。

本報告発掘調査に先立つ、西富田字新田811-1（旧）おける試掘調査において、本報告第14号住居跡を含め計４棟の竪穴住居跡と土坑４基が新たに確認された。この試掘調査においてはまた、従来方形周溝墓の可能性が指摘されていた基壇状の高まりにトレンチを設定し、人力掘削による確認を行った。このトレンチ調査の結果江戸期の、礫層に到る掘削（井戸と推定される）の排土が高まり状になったものと判明した。



第３図　西富田新田遺跡Ａ・Ｂ地点

西富田新田遺跡はA・B地点の発掘調査及び試掘調査によって、古墳時代和泉式期から鬼高式期の竪穴住居跡14棟（未調査３棟）、土坑14基（未調査４基）が確認されている。本集落の存続期間は、竪穴住居跡の主軸方位、重複関係及び近接する分布状況から竪穴住居存続期間の三時期に亘るものであろう。



第４図　西富田新田遺跡と調査地点位置図

第２節　基本層序及び検出された遺構と遺物

１．基本層序

第５図は本発掘調査区、南東隅部付近で観察された基本層序概略図である。本調査地点現地表面の標高は、66.3mである。現地表面から遺構確認面までの深さは、概ね50cmを測る。

遺構確認面までの土層は、図に示したように４層に分層される。試掘調査以前の当該地は雑木林であり、最上部に８cm程の腐食土壌発達が見られた。第Ⅱ層は天明３（1783）年の爆裂を起源とする、浅間山系Ａ軽石（As-A）を多量に含む土層であり、雑木林以前の耕作土層と考えられる。この層は江戸時代後半以降に比定される。以下の遺構確認面までの土層には指標となるテフラが観察されず、第Ⅲ層がやや長期間となってしまうが、古代から江戸時代前半期に比定されよう。第Ⅳ層は第Ⅴ層へと移行する漸移層であり、武蔵野面に相当するものである。第Ⅴ層上面は約1.3～1.4万年前に噴出した浅間板鼻黄褐色軽石（As-YP）が観察された。

西富田新田遺跡Ｂ地点基本土層説明

第Ⅰ層　腐食土層　：植物起源の腐食を主体とする層。

第Ⅱ層　暗灰褐色土層：暗褐色土を主体とし、浅間山系Ａ軽石を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性無し。

第Ⅲ層　暗茶褐色土層：暗茶褐色土を主体とする。しまりは軟らかく、粘性無し。

第Ⅳ層　明茶褐色土層：明褐色土を主体とし、黒褐色土・黄褐色土粒子を斑状に少量含む。しまりはやや硬く、粘性は低い。（漸移層）

第Ⅴ層　黄褐色土層　：黄褐色ローム層（遺構確認面）

第５図　基本土層概略図

２．竪穴住居跡

第14号住居跡（第６～11図、第１・２表、図版１～５）

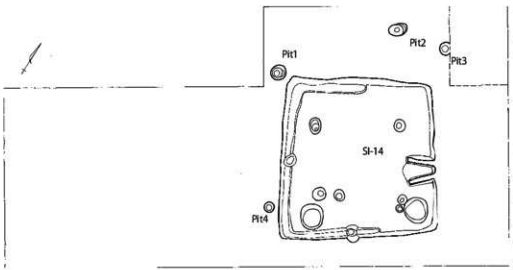
調査地点の中央、やや東寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色ローム層（第Ⅴ層）上面である。

遺構確認面における平面形態は、カマドを有する東側壁が西側壁に対しわずかに短い台形状を呈する。東側壁長は４m10cm、西側壁長は４m50cm、長軸長は４m47cm、短軸長は４m24cmを測り、主軸方位はＮ－77.0°－Ｅである。すべての壁の立ち上がりが明瞭であり、直線的に立ち上がる。壁高は、東側壁が18cm、西側壁が24cm、南側壁が18cm、北側壁が22cmである。

壁溝は西側壁から、北側壁及び南側壁のそれぞれほぼ中央にかけて巡る。北側の壁溝は幅38cm、深さ約５cm、西側の壁溝は幅20～30cm、深さ約５cm、南側の壁溝は幅25cm、深さ約７cmを測る。

床面は、黄褐色ロームブロックを主体土とした貼り床がなされ、硬化した床面は概ね平坦である。特に南側壁寄り中央部分、P-５北側の床面は小瘤状に隆起した状態であり、マンガン粒子の凝集が観察された。

主柱穴は、P-１～P-４の４つである。南側壁中央の壁溝に位置するP-５は梯子を敷設するためのも



第６図　西富田新田遺跡Ｂ地点全測図

のと考えられる。角度を持たすため、南側壁を10cmほど外側へ掘り込んでいる。柱穴の規模は、P-1が長軸36cm、短軸39cm、深さ51cm、P-2が長軸30cm、短軸24cm、深さ61cm、P-3が長軸38cm、短軸36cm、深さ57cm、P-4が長軸46cm、短軸32cm、深さ47cmを測る。所謂梯子ピットの規模は、長軸48cm、短軸30cm、深さ26cmを測る。上記以外にも本住居跡内で３基のピットが検出されているが、これらは共に後世に掘削されたものと考えられる。

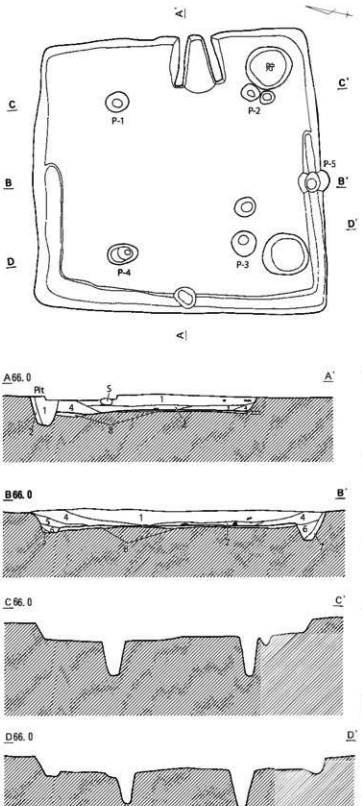
カマドは、東側壁の中央やや南寄りに設けられている。遺存する袖の平面形態は、両袖共に直線状に、かつ焚口に向かって開く「ハ」字状を呈する。両袖共に粘土及び暗褐色土を用い、左袖の焚き口部分は被熱により赤色化していた。全長は89cm、最大幅は82cmを測る。燃焼部奥は東側壁と呼応するように直線状に留まる。火床面は、わずかに堀方を有する。明灰褐色土（第７図上段左第５層、最終使用面）上の焚き口寄りに明褐色土（同図第４層）を配し、その上に高坏形土器が逆位に、支脚として設置されていた。（第８・９図No.８）最終的に袖部の切開及び掘削を実施したが、白玉等の石製品は検出されなかった。

貯蔵穴は、カマド右袖と住居南側壁の中央やや南側壁寄りに、東側壁から16cmほど離れて検出された。平面形態は、やや不整な円形である。壁は直線的に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈する。長軸70cm、短軸65cm、床面からの深さは約49cmを測る。

床下土坑は、南西隅部の南側壁寄りに検出された。平面形態は、やや不整な円形である。壁はやや角度を有して直線的に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈する。覆土は３層に分層され、いずれの層にも未風化のローム小塊が含まれ、さらに南壁側からの堆積が観察された。このことから人為的に埋め戻されたものであり、かつ南側壁周溝にほぼ接する位置にあることから、本住居構築中の貼り床面敷設直後に掘削され、短期間のうちに埋め戻されたものと考えられる。長軸72cm、短軸62cm、床面からの深さは約31cmを測る。

本住居跡の覆土は、７層に分層された暗褐色土・明褐色土を主体とするものであり、自然堆積層と考えられる。貼床の土層は単一層であり、黄褐色ロームを主体とするものである。

出土遺物は、カマド内（第９・10図No.６(坏部の一部)・No.７・No.17）カマド前面（第９・10図No.２・No.３・No.４・No.６（坏部の一部から脚裾部)・No.10・No.14・No.20・No.21)、西側の主柱穴間（P-３・４の間、第９・10図No.９・No.15・No.18・No.19)、さらに住居跡北東側隅部（第９・10図No.11・No.16）に集中的に検出された。



第7図

第14号住居跡土層説明

第1層　暗褐色土：暗褐色土を主体とし、黒褐色土小塊（～1㎝）を少量、ローム粒子（～0.5㎜）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層　明褐色土：明褐色土を主体とし、暗褐色・黒褐色土粒子（～0.5㎜）を中量、ローム小塊（～5㎜）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層　明灰褐色土：ローム粒子・粘土粒子（～0.5㎜）を主体とし、焼土粒子（～2㎝）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。

第4層　明褐色土：明褐色土を主体とし、暗褐色・黒褐色土粒子（～0.5㎜）を少量、ローム小塊（～1㎝）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第5層　明褐色土：明褐色土を主体とし、暗褐色・黒褐色土粒子（～0.5㎜）を微量、ローム小塊（～2㎝）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第6層　暗褐色土：暗褐色土を主体とし、黒褐色土小塊（～2㎝）を少量、ローム小塊（～1㎝）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

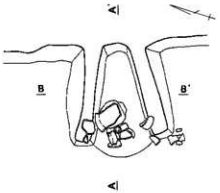
第7層　明褐色土：明褐色土を主体とし、黒褐色土小塊・ローム小塊（～2㎝）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

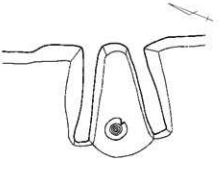
第8層　明褐色土：ローム小塊（～3㎝）を主体とし、暗褐色土粒子・黒褐色土粒子（～0.5㎜）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性は低い。〔貼床〕

Pit

第1層　黒褐色土：黒褐色土を主体とし、ローム粒（～0.5㎜）を少量、ローム小塊（～5㎝）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。

第2層　明褐色土：明褐色土を主体とし、黒褐色土小塊・ローム小塊（～2㎝）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。





B 65.9　　B'

第14号住居跡カマド土層説明

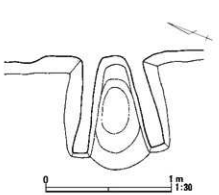
第１層　黄灰赤褐色土：暗褐色土を主体とし、灰色粘土粒子（～２㎜）を多量、焼土粒子（～２㎜）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。

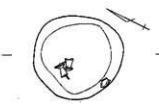
第２層　暗灰褐色土:暗褐色土を主体とし、灰色粘土粒子（～２㎜）を多量、焼土粒子（～２㎜）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。

第３層　暗赤褐色土：暗褐色土を主体とし、焼土小塊（～１㎝）を中量、焼土**粒子（～２㎜）**・炭化物粒子（～１㎜）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第４層　明褐色土　：明褐色土を主体とし、暗褐色・黒褐色土粒子（～0.5㎜）を少量、ローム小塊（～１㎝）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第５層　明灰褐色土：明灰褐色土を主体とし、焼土粒子・炭化物粒子（～１㎜）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。





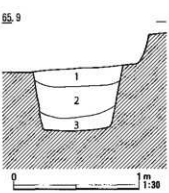
第14号住居跡貯蔵穴土層説明

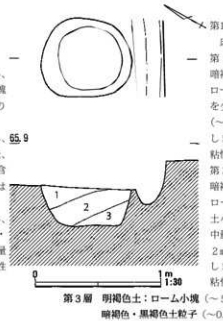
第１層　暗褐色土：暗褐色土を主体とし、焼土粒子（～２㎜）・粘土小塊（～５㎝）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第２層　暗褐色土：暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～２㎜）を中量、ローム小塊（～８㎜）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第３層　明褐色土：明褐色土を主体とし、風化状のローム小塊（～２㎝）・ローム粒子（～0.5㎜）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。

65.9





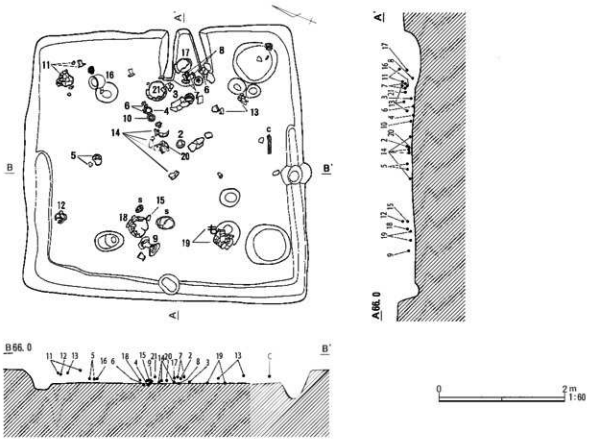
第14号住居跡
床下土坑土層説明

第１層　暗褐色土：暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～４㎝）を少量、ローム粒子（～２㎜）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性は低い。

第２層　明褐色土：暗褐色土を主体とし、ローム小塊・黒褐色土小塊（～４㎝）を中量、ローム粒子（～２㎜）を多量に含む。しまりはやや硬く、粘性は低い。

第３層　明褐色土：ローム小塊（～５㎝）を主体とし、**暗褐色・黒褐色土粒子**（～0.5㎜）を中量含む。しまりはやや硬く、粘性は低い。

第８図　第14号住居跡カマド・貯蔵穴・床下土坑平面・断面図

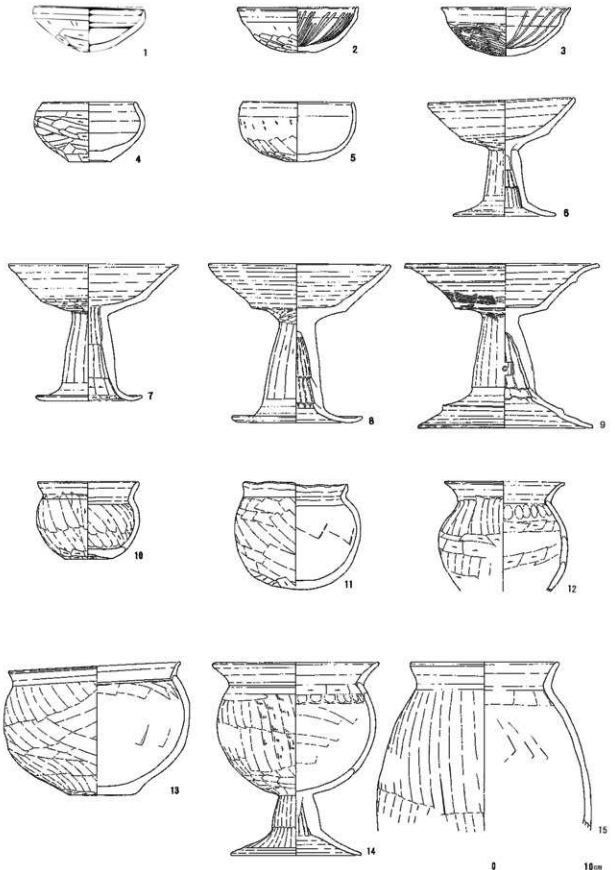


第９図　第14号住居跡遺物出土状況

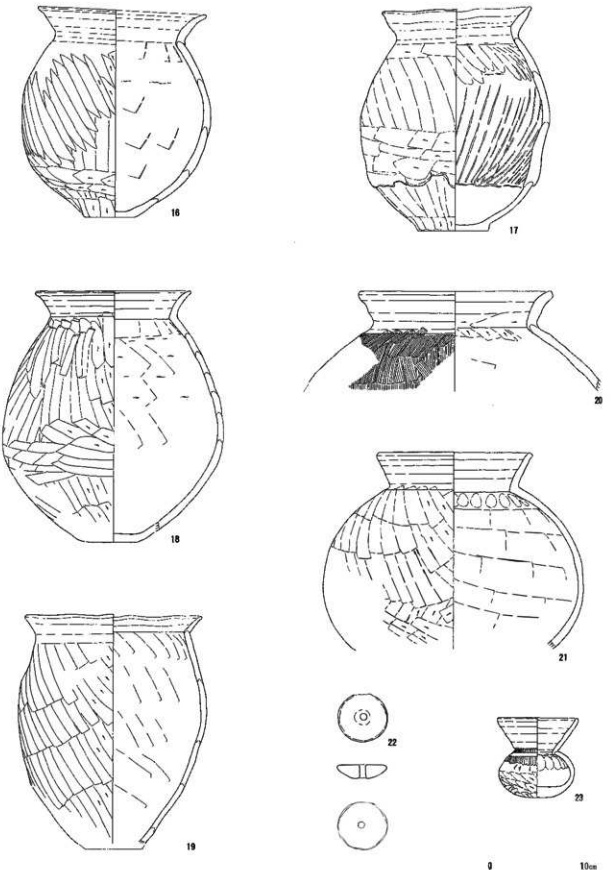
カマド内から横位の状態で検出された甕形土器（No.17）は、支脚状に懸架されていたものがカマド天井部の崩落とともに、カマド内に転落したものと考えられる。カマド以外から出土した遺物は、総じて床面から浮いた状態で検出されている。床面ないし床面付近から検出されたものは、カマド前面から出土した埦形土器（No.３・No.４）、高坏形土器（No.６・脚体部から脚裾部）、坩形土器（No.10・若しくは埦形土器か）、そしてやや広範囲に広がって検出されている脚の付く鉢ないし埦形の土器（No.14）である。これらの土器の内、埦形土器（No.３）はカマドのほぼ正面の床面上に正位の状態で、また（No.４）の埦形土器と（No.10）の坩形土器はカマド左袖部の正面のやや北寄りの床面に、並べおかれた状態で出土したものである。脚付きの鉢形土器（No.14）は、住居跡中央のカマド寄りの床面上からやや広範囲に分布するものの、やはり床面上から検出されたものである。

住居南側壁寄りのやや東側において検出された炭化材（C）は、床面よりやや浮いた状態で検出されたものである。住居床面には被熱面の形成は観察されず、また床面上において多量の焼土粒子及び炭化物粒子は見られなかったことから、本址は火災を被ったものではないと考えられる。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から古墳時代和泉式期と考えられる。



第10図　第14号住居跡出土遺物（1）



第11図　第14号住居跡出土遺物（2）

第1表　第14号住居跡　出土遺物観察表（1）

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 11.5 底径 — 器高 4.7	口端部は丸い。口辺部はわずかに内傾する。丸底。	外面—口辺部はヨコナデ、底部上半はナデ、下半はヘラケズリ。内面—口端部～底部上位はヨコナデ、底部中位～下位はナデ。	片・石・角・白 内外—暗橙褐色・暗褐色	残：80%
2	土師器 壺	口径 12.6 底径 2.3 器高 4.8	口端部はわずかに肥厚する。器内面に放射状暗紋を施す。底部はやや凹低状を呈する。	外面—口辺部はヨコナデ、底部上半はナデ、下半はヘラケズリ。底部はナデ。内面—口辺部はヨコナデ。底部はナデ後放射状暗紋を施す。	片・石・角・赤 内—暗橙褐色 外—暗橙褐色・暗褐色	残：75%
3	土師器 壺	口径 13.6 底径 — 器高 5.1	口端部は丸い。口唇部は大きく開く。器内面に粗い放射状暗紋を施す。丸底。	外面—口辺部はヨコナデ。底部はヘラケズリ後ミガキ。内面—口辺部～底部上位はヨコナデ、中位～下位はナデ。内面調整の後底部～口唇部に粗い放射状暗紋を施す。	片・石・角・赤・白 内外—暗橙褐色	ほぼ完形
4	土師器 壺	口径 9.6 底径 4.3 器高 6.2	口端部は丸い。口唇部はわずかに立ち上がる。やや凹底。	外面—口辺部はヨコナデ。体部はヘラケズリ。底部はナデ。内面—口辺部～体部上半はヨコナデ、下半～底部はナデ。	片・石・角・雲・赤 内—暗褐色 外—暗橙褐色・暗褐色	残：80%
5	土師器 甕	口径 11.6 底径 — 器高 6.3	口端部はわずかに直立する。丸底。	外面—口辺部はヨコナデ、底部上位はナデ、中位はヘラケズリ後ナデ、下位はヘラケズリ。内面—口辺部はヨコナデ。底部はナデ。	片・石・角・赤・白 内—暗橙褐色 外—暗橙褐色・暗褐色	残：70%
6	土師器 高坏	口径 15.5 底径 10.7 器高 12.2	口縁部は丸い。口唇部はやや内傾して立ち上がる。坏部器内面の剥落顕著。柄部は脚体部内面にナデツケられている。脚体部中位の内面には絞り痕が顕著、裾部は大きく開く。	外面—口辺部はヨコナデ。坏底部はヘラケズリ。脚体部は工具による縦位のナデ後ナデ、裾部はヨコナデ。内面—口辺部はヨコナデ。坏底部はナデ。脚体部上位はナデ、下位はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	片・石・角・白 内外—淡橙褐色	残：70%
7	土師器 高坏	口径 17.8 底径 11.2 器高 14.4	口端部は丸い。口唇部は大きく開く。坏部器内面の剥落顕著。脚体部上位の内面には絞り痕が顕著、裾部は大きく開き、端部は反り上がる。	外面—口辺部はヨコナデ。坏底部はヘラケズリ。脚体部は工具による縦位のナデ後ナデ、裾部はヨコナデ。内面—口辺部はヨコナデ。坏底部はナデ。脚体部中位～下位はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	片・石・角・赤・白 内外—暗橙褐色	残：60%
8	土師器 高坏	口径 19.0 底径 13.9 器高 16.8	口端部は丸い。口唇部はわずかに内傾する。坏部器内面の剥落顕著。脚裾部は大きく開き、端部は反り上がる。	外面—口辺部ヨコナデ。坏底部～脚体部下位はヘラケズリ後ナデ、裾部はヨコナデ。内面—口辺部はヨコナデ。坏底部はナデ。脚裾部はヨコナデ。	片・石・角・雲・赤・白 内外—橙褐色・暗褐色	残：90%
9	土師器 高坏	口径 20.2 底径 18.4 器高 17.3	口端部は平坦であり、わずかに下方へ肥厚する。坏部中位やや上および脚裾部中位に明瞭な稜を有する。坏部下位に木口状工具による縦位ナデの調整痕が部分的に残る。脚体部下位に棒状工具端部による押圧を施す。	外面—口辺部はヨコナデ。坏部下位は木口状工具による横位のナデ後横位ミガキ。底部は木口状工具によるナデ後ナデ。脚体部は木口状工具による縦位のナデ後ナデ、裾部はヨコナデ。内面—口辺部はヨコナデ。坏底部はナデ。脚体部下位は指頭による押圧ナデ、裾部はヨコナデ。	片・石・角・雲・赤 内外—淡暗橙褐色	残：90%
10	土師器 壺	口径 10.5 底径 4.8 器高 8.2	口端部は丸い。胴部中位やや上に最大径を有する。凹底。	外面—口縁部はヨコナデ。胴部上位～中位はヘラケズリ後ナデ、下位～底部はヘラケズリ。内面—口縁部はヨコナデ。胴部は斜位のナデ。底部はナデ。	片・石・角・雲・赤 内—橙褐色 外—暗橙褐色・暗褐色	ほぼ完形
11	土師器 鉢	口径 10.8 底径 — 器高 11.2	口縁部の歪みが顕著。丸底。	外面—口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ後ナデ。底部はナデ。内面—口縁部はヨコナデ。胴部上位は工具による斜位のナデ後ナデ、中位～底部はナデ。	片・石・角・雲・赤 内外—暗橙褐色	残：80%
12	土師器 鉢	口径 12.7 底径 — 器高 —	口縁部は丸く、わずかに下方へ肥厚する。口唇部は大きく開く。	外面—口縁部はヨコナデ。胴部上位は木口状工具による縦位のナデ後ナデ、中位は横位のヘラケズリ、下位は木口状工具によるやや斜位のナデ後一部ヘラケズリ。内面—口縁部はヨコナデ。胴部上位は指頭による押圧ナデ、中位は木口状工具による横～斜位のナデ後ナデ。	片・石・角・赤 内—暗褐色 外—暗褐色	残：50%

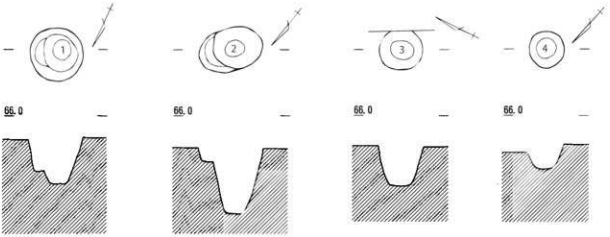
第２表　第14号住居跡　出土遺物観察表（２）

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
13	土師器 鉢	口径　18.1 底径　6.4 器高　13.6	口端部は丸く、外側に肥厚する。胴部中位やや上に最大径を有する。	外面－口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ後ナデ。底部はヘラケズリ。内面－口縁部はヨコナデ。胴部は木口状工具による斜位のナデ後ナデ。底部はナデ。	片・石・角・赤・白 内－橙褐色 外－橙褐色・暗褐色	残：60%
14	土師器 脚付鉢	口径　17.3 底径　13.7 器高　20.3	口端部は丸い。口縁部は大きく外反する。体部中位に最大径を有する。脚体部は孤状に開き、裾部は大きく開く。	外面－口縁部～体部上位はヨコナデ、上位～中位は木口状工具による斜位のナデ後ナデ、下位はヘラケズリ後ナデ。脚体部～裾部は木口状工具によるナデ後ナデ、裾端部はヨコナデ。内面－口縁部はヨコナデ。体部上位は木口状工具による横位のナデ，中位は木口状工具によるナデ後ナデ。脚裾部はヨコナデ。	片・石・角・赤・白 雲・赤・白 内－暗褐色 外－暗橙褐色・黒褐色	ほぼ完形
15	土師器 甕	口径　15.4 底径　－ 器高　－	口端部は丸い。二次被熱のため器表面の剥落顕著。	外面－口縁部はヨコナデ。胴部は縦位のヘラケズリ後粗いナデ。内面－口縁部はヨコナデ。胴部は木口状工具によるナデ後ナデ。	片・石・角・白 内外－暗赤褐色	残：40%
16	土師器 甕	口径　17.4 底径　5.7 器高　21.8	器形やや歪む。口端部は丸く、口縁部は大きく外反する。胴部中位に最大径を有する。	外面－口縁部はヨコナデ。胴部上位はナデ後一部ヘラケズリ、中位～底部はヘラケズリ。内面－口縁部はヨコナデ。胴部は木口状工具によるナデ後ナデ。底部はナデ。	片・石・角・雲・赤・白 内－橙褐色 外－淡暗橙褐色・暗褐色	ほぼ完形
17	土師器 甕	口径　15.6 底径　7.4 器高　23.5	器形やや歪む。胴部中位に最大径を有する。胴部下位の接合痕が顕著に残る。	外面－口縁部～胴部上位はヨコナデ。胴部はヘラケズリ後粗いナデ。内面－口縁部はヨコナデ。胴部上位は指頭による斜位のナデ、中位は木口状工具角部によるナデ。底部はナデ。	片・石・角・雲・赤・白 内外－暗橙褐色	
18	土師器 甕	口径　16.5 底径　－ 器高　(26.5)	口端部は丸い。口唇部は大きく外反する。胴部中位は最大径を有する。	外面－口縁部はヨコナデ。胴部～底部はヘラケズリ。内面－口縁部はヨコナデ。胴部上半は木口状工具による斜位のナデ後ナデ、下半～底部はナデ。	片・石・角・雲・赤・白 内外－暗橙褐色	残：80%
19	土師器 甑	口径　18.2 底径　－ 器高　(24.9)	口縁部は丸い。口縁部は大きく外反する。胴部中位やや上に最大径を有する。	外面－口縁部～胴部上位はヨコナデ、胴部は斜位のヘラケズリ。内面－口縁部はヨコナデ。胴部は木口状工具によるナデ後ナデ。	片・石・角・白 雲・　赤・白 内－淡褐色 外－暗橙褐色・淡褐色	残：70%
20	土師器 壺	口径　20.0 底径　－ 器高　－	口端部は丸い。口唇部は大きく外反する。	外面－口縁部はヨコナデ。胴部は刷毛状工具による斜位のナデ，内面－口縁部はヨコナデ。胴部は木口状工具による斜位のナデ後ナデ。	片・石・角・白 内－暗褐色 外－淡褐色・暗褐色	残：20%
21	土師器 壺	口径　16.0 底径　－ 器高　－	口端部は面状を成す。口縁部は直線的に外反する。胴部はやや扁平か。	外面－口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ後ナデ。内面－口縁部はヨコナデ。胴部上位は指頭による押圧ナデ。胴部は木口状工具によるナデ後ナデ。	片・石・角・雲・赤・白 内外－暗橙褐色	残：30%
22	土製紡錘車	上径　5.2 下径　1.4			片・石・赤・白 淡橙褐色	ほぼ完形
23	土師器 坩	口径　8.6 底径　－ 器高　8.4	口端部は丸い。口唇部はわずかに内傾する。口縁部は大きく開く。胴部中位に最大径を有する。丸底。	外面－口縁部はヨコナデ。胴部上位は刷毛状工具による縦位のナデ後一部に口縁部ヨコナデに伴うヨコナデ、中位はナデ。下位はヘラケズリ後ナデ。底部はヘラケズリ。内面－口縁部はヨコナデ。胴部上位は指頭による押圧ナデ、中位～底部はナデ。3.5本/1cm。	片・石・角・白 内外－淡暗褐色	残：70% A・B地点間表採

3．ピット

第１～４号ピット（第11図）

本調査地点中央から東側に検出した遺構である。いずれも暗褐色土を覆土に有し、古墳時代のものと考えられる遺構である。平面形態は概ね円形を基調としている。第１・２号ピットは一部にテラス状の平坦部を有する。第３・４号ピットの断面形態は逆台形を呈する。第１号ピットは長軸43cm、短軸42cm、深さ34cmを測る。第２号ピットは長軸51cm、短軸34cm、深さ51cmを測る。第３号ピットは長軸35cm、検出部分での短軸30cm、深さ32cmを測る。第４号ピットは長軸30cm、短軸28cm、深さ14cmを測る。



第12図　ピット平面・断面図

第Ⅳ章　まとめにかえて

西富田新田遺跡は周辺の発掘調査の成果から、古墳時代和泉式期になり新たに設営された集落の一つと考えれらるものである。本報告の第14号住居跡は、集落開始期からやや後出する時期に営まれたものと考えられる。A地点の各住居跡の詳細な時期は知り得ないが、その密集するあり方と比較するならば、第14号住居跡はやや離れており、かつ周辺に遺構が存在しないことから性格の異なるあり方として捉えられよう。

本報告発掘調査に先立つ平成22年10月に実施された試掘調査において、第14号住居跡の南側に埋没微低地が検出されている。この谷は、本調査区南東部に谷頭を有し巻尾状に北西方向に展開し西原湧水池に続くと考えられるものである。またこの埋没微低地の立ち割り調査では、古墳時代遺物の包含を確認されず古墳時代集落の展開期には概ね埋没が完了していたものと推定される。しかしながら、竪穴住居跡がこの埋没微低地以南から検出されなかったことから、集落の設営に当たり一定の窪状地形を呈していたものと考えられ、この埋没谷が西富田新田集落の西限と考えられよう。

参考文献

大谷　徹　（2007）『夏目・夏目西・弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集
太田　博之　（2008）『離塚遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第12集
太田　博之・松本　完　（2009）『離塚Ⅱ・窓ケ谷戸・小島本伝』本庄市埋蔵文化財調査報告書第15集
柿沼　幹夫　他　（1979）『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書21集
佐藤　好司　（1993）『古墳時代の祭祀』第２回東日本埋蔵文化財研究会第Ⅱ分冊
増田　一裕　（1990）『諏訪・久城前・久城住来北遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第17集
増田　一裕　（1992）『今井諏訪遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第21集
本庄市史編集室　（1976）『本庄市史』資料編

図　　版

西富田新田遺跡B地点周辺試掘調査（1） 南西から
〔トレンチ設定作業風景〕

西富田新田遺跡B地点周辺試掘調査（2） 南東から
〔遺構確認作業風景〕

西富田新田遺跡B地点周辺試掘調査（3） 南西から
〔墓壇状隆起部分確認作業風景〕

西富田新田遺跡B地点周辺試掘調査（4） 北から
〔トレンチ中央部分、第14号住居跡確認状況〕

西富田新田遺跡B地点表土除去作業風景 南東から

第14号住居跡確認状況 南東から

第14号住居跡土層堆積状況（1） 南東から
〔SPA-A′ライン〕

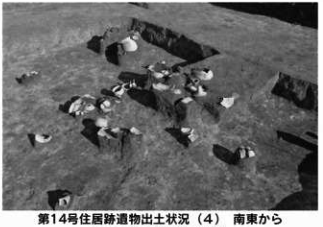
第14号住居跡土層堆積状況（2） 西から
〔SPB-B′ライン〕

図版2

第14号住居跡遺物出土状況（1） 北西から

第14号住居跡遺物出土状況（2） 南西から

第14号住居跡遺物出土状況（3） 北西から



第14号住居跡遺物出土状況（4） 南東から
〔カマド周辺の出土状況〕

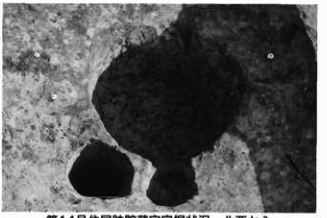
第14号住居跡カマド土層堆積状況 南東から

第14号住居跡カマド遺物出土状況 西から

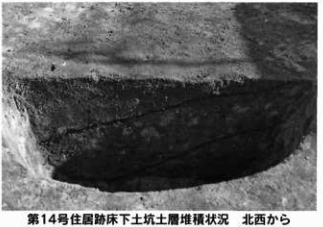
第14号住居跡カマド完掘状況（1） 西から

第14号住居跡カマド完掘状況（2） 南東から

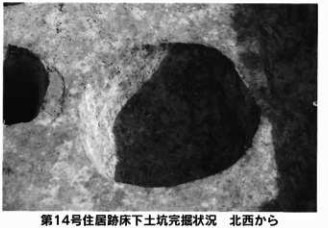
第14号住居跡貯蔵穴土層堆積状況　北西から



第14号住居跡貯蔵穴完掘状況　北西から



第14号住居跡床下土坑土層堆積状況　北西から



第14号住居跡床下土坑完掘状況　北西から

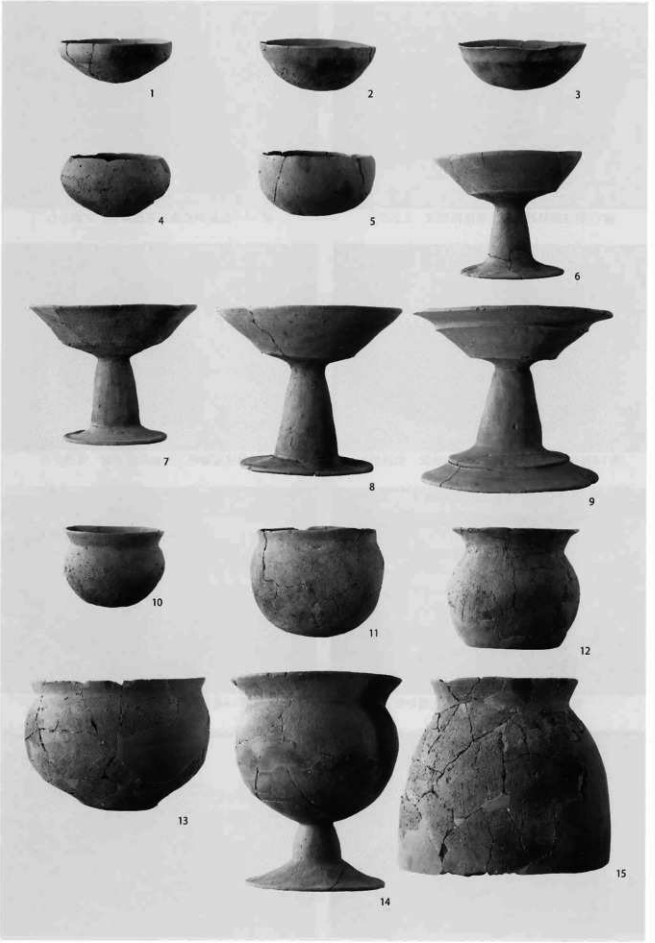
第14号住居跡完掘状況　北西から

第14号住居跡完掘状況　南東から

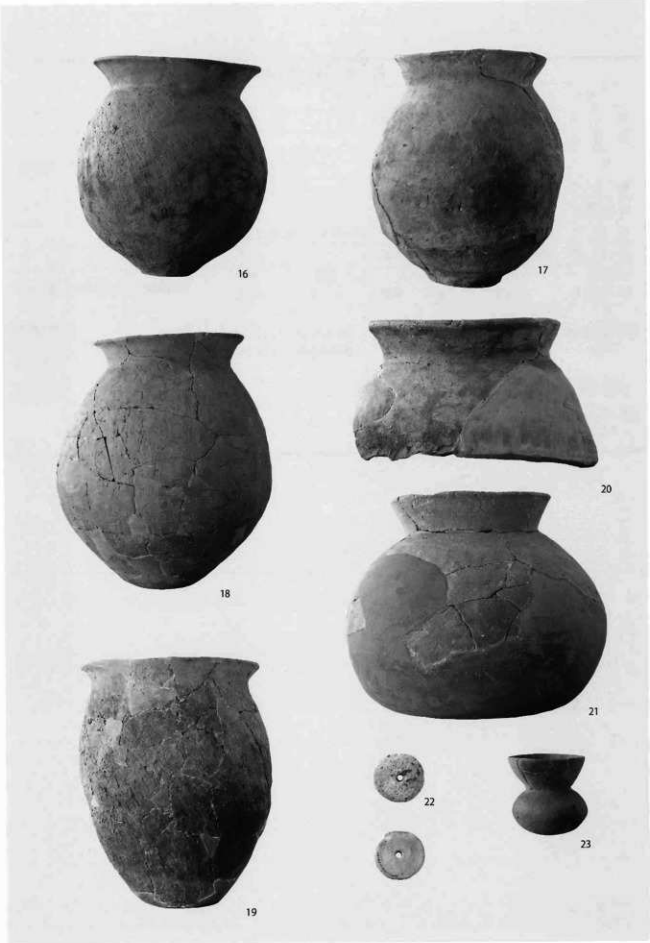
西富田新田遺跡B地点調査区全景　北西から

西富田新田遺跡B地点調査区全景　南西から

図版4



第14号住居跡出土遺物（1）



第14号住居跡出土遺物（2）

報告書抄録

フリガナ	ニシトミダシンデンイセキⅡ－Bチテンノチョウサー		
書名	西富田新田遺跡Ⅱ　―B地点の調査―		
副書名			
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書	巻次	第26集
編著者	太田博之・大熊季広		
編集機関	本庄市教育委員会		
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号　℡0495-25-1185		
発行日	西暦2011年（平成23年）6月30日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	(°′″)	(°′″)			
西富田新田遺跡（ニシトミダシンデンイセキ） B地点	本庄（ホンジョウ）市富田字新田（シンデン）811-1	112119	53-094	36°12′51″ （世界測地系）	139°09′46″ （世界測地系）	20101221～ 20110105	84.1㎡	分譲宅地造成にかかる区画道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西富田新田遺跡（ニシトミダシンデンイセキ） B地点	集落	古墳時代	竪穴住居1軒・ピット4基	土師器・土製品	

本庄市埋蔵文化財調査報告書第26集

西富田新田遺跡Ⅱ

—B地点の調査—

平成23年6月30日　印刷
平成23年6月30日　発行

発行／本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

印刷／㈲文林堂印刷所
埼玉県本庄市寿3-1-1